



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「ため」と「ために」 : 農学系論文コーパスの分析から
Author(s)	池上, 素子; Ikegami, Motoko
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 8, 14-27
Issue Date	2004-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45643
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC008_002.pdf



「ため」と「ために」

－農学系論文コーパスの分析から－

池上素子

要 旨

本稿では、レポート作成の予備教育としての作文教育に生かすことを目的として農学系論文コーパスを分析し、原因用法を中心に「ため」と「ために」の使用実態の相違を明らかにすることを試みた。その結果明らかになったことは以下の通りである。

- 1) 「ため」は主に原因・理由用法に、「ために」は主に目的用法に用いられる。
- 2) 「ため」は原因にも理由にも用いられるが、「ために」は原因に用いられることはあっても、ほとんど理由に用いられることはない。
- 3) 原因を表す「ために」にはいくつかの特徴が認められた。それは、①「ため」より連体修飾節内に収まるものが多い。②談話レベルにおいて「ために」が用いられやすい文脈がある、ということである。談話レベルにおいて用いられやすい文脈とは、a)ある現象を述べ、その原因を後から記述する文脈、b)ある現象を述べ、それがいくつかの原因の連鎖の結果起きたことであることを記述する文脈、c) 対比・逆接の文脈、の三つである。これらa)～c)の特徴は、原因を表す「ため」では「ために」ほど顕著に現れず、また「ために」独自の特徴も認められなかった。「ために」に上記の特徴が「ため」よりも顕著に現れた原因は、いずれも焦点化によって説明ができる。

これらの知見を作文教育に生かせば、学習者の疑問に答え、より適切な文章の産出の一助となると思われる。

〔キーワード〕「ため」、「ために」、農学系論文、原因・理由、焦点化

1. 目的

筆者は、現在、大学・大学院等で学ぶ留学生に対する作文教育に生かすため、学術論文コーパスにおける種々の原因・理由表現の用いられ方を分

析している。本研究はその一環であり、主に原因用法を中心として「ため」と「ために」の使用実態の相違について明らかにすることを目的としている。「ため(に)」は論文等の硬い文章では最も多く用いられる表現の一つと言ってよい。レポート作成のための予備教育において、「ため(に)」は外すことのできない項目であるが、中でも「ため」と「ために」はどう違うのかという質問を毎回のよう¹⁾に受ける。しかし、両者の論述文における違いを明確にした研究は管見では見あたらない。したがって、これらの使用上の違いを明らかにすることは、学習者の疑問に適切に応える上で意味がある²⁾と考える。

2. 分析の対象・方法

本稿で分析の対象としたコーパスは、以下の農学系論文である。他分野のデータも収集したが、まだ分析が終わっていないため、本稿では以下のデータについて分析した結果のみを報告する。

分析対象：農林水産研究情報センターネットワークライブラリ

システム研究報告データベース 論文全文60本 (3.81MB)

本稿では、まず、上記の論文から「ため」を含んだ文を全て抽出し、「目的」、「原因・理由」、「利益」に分けた¹⁾。(1)は目的の、(2)は原因・理由の、(3)は利益の例である(例文は特に断りがない限り、全て上記のコーパスから引用したものである。上記のコーパス以外から引用した場合は文末に出典を()で示した。下線は全て引用者による)。その後、「ための」「ためには」「ためである」を取り除き、「ため」と「ために」についてのみ分析を行った。

(1)十分性を示すために、まず次の補題を証明しておく。

(2)供試草地を造成した1987年には、8月に1回目の播種を行ったが、その直後に降雨のため種子が流失し、9月に2回目の播種を行った。

(3)一般業者の多くがKUDの組合員であることに加え、組合員のために精米や籾の売買を行うことはKUDの立派な経済業務の1つであるからである。

3. 分析の結果

3.1 「ため」文と「ために」文の分布

「ため」を含む文全体の分布状況は表1の通りである。表中の数字は出現頻度を、()内の数字は総出現頻度における割合を表す(以下、表中の数字の表記方法は表1に準ずる)。

表1 《「ため」を含む文全体の分布》

	た め	た め に	た め に は	た め の	総 計
原因・理由	734(73.3)	151(29.7)	0(0.0)	0(0.0)	885(46.9)
目 的	267(26.6)	356(69.9)	179(100.0)	198(100.0)	1000(53.0)
利 益	1(0.1)	2(0.4)	0(0.0)	0(0.0)	3(0.1)
総 計	1002(100%)	509(100%)	179(100%)	198(100%)	1888(100%)

このうち、本稿の調査の対象外である「ための」(198例)、「ためには」(179例)、原因・理由の「ため」文に含まれている「ためである」(157例)、目的の「ため」文に含まれている「ためである」(2例)を取り除いたところ、以下のような分布となった²⁾。

表2 《「ため」と「ために」の分布》

	た め	た め に
原因・理由	577(68.5)	151(29.7)
目 的	265(31.4)	356(69.9)
利 益	1(0.1)	2(0.4)
総 計	843(100%)	509(100%)

表2からわかるように、「ため」は約70%が原因・理由を、「ために」は逆に約70%が目的を表す時に用いられている。筆者の語感でも、「に」の有無だけが異なる(4a)・(4b)のような文があった場合、(4a)は目的に、(4b)はどちらかという原因・理由に解釈される((4a/b)は筆者の作例である)。

(4a) 来年アメリカへ行くために貯金している。

(4b) 来年アメリカへ行くため貯金している。

このことから、「ため」が原因・理由に、「ために」が目的に用いられることが多いという特徴は、特に農学系論文にのみ見られるものではなく、両者が普遍的に持つ性格である可能性があると考えられる。

「ため」と「ために」の違いの全貌を明らかにするには、表2の全てについて分析、検討を行わなければならないが、1.で述べたように、本稿は種々の原因・理由表現の用いられ方に関する研究の一環として着手したものであるため、ここでは、目的、利益用法についてはこれ以上言及しない。

3.2 原因と理由について

本節では、原因・理由用法の「ため」と「ために」をさらに詳しく調べるため、表2の原因・理由を原因用法と理由用法に下位分類した。何を以て原因とし、何を以て理由とするかという定義は難しいが、ここでは、言語学研究会・構文論グループ（1985）を参考に、客観的な事実の因果関係を表すものを「原因」、その論文の著者が起こす意志的な行為、あるいは著者が下す判断や意見の動機付けとなるものを「理由」として分類した³⁾。例えば、(5)は原因用法、(6)・(7)は理由用法である。

- (5)また、硬質であるため、割れ目は比較的広範囲にわたって連続しており、三次元的にとらえても平面的な形状を示すことが多い。
- (6)また、本実験では種子発生を考慮に入れると要因が複雑になるため、除草剤使用により種子発生を防いだ。
- (7)しかし、井内から帯水層に流入する速度が低い場合には、(中略)流動状態が自然条件と異なるため好ましくない。

分類の結果、以下のような分布になった。

表3 《原因・理由用法の「ため」と「ために」の下位分類》

	た め	た め に
原 因	352(61.0)	136(90.1)
理 由	225(39.0)	15(9.9)
総 計	577(100%)	151(100%)

この表にあるように、「ため」は原因：理由が6：4で、どちらかとい

うと原因に用いられることが多いが、理由にも多く用いられることがわかる。これに対して「ために」は、原因が90.1%と、ほとんど理由に用いられことはない。

原因・理由用法の「ため(に)」の用いられ方を明らかにするためには、原因用法、理由用法双方についてさらに精査しなければならないが、理由用法についてはまだ分析が終わっていないため、以下では、このうちの原因用法について分析した結果を報告する。

3.3 原因の「ため」と「ために」

3.3.1 文レベルにおける特徴

本節では、原因を表す「ため」と「ために」について考察する。まず一文レベルでどのような違いがあるか調べたが、どちらも特に前接する語、後接する語に特徴は見られなかった。

益岡(1997)は「ため」と「ために」が構成する原因節について、それぞれ主張の焦点、疑問の焦点になりうるか否かをテストしている。益岡は、

(8)雪が降ったために新幹線が止まったのだ。(益岡(1997)より)

(9)雪が降ったため新幹線が止まったのだ。(同上)

という例を挙げ、(8)では原因節が主張の焦点になりうるが、(9)では不可能であるとしている。また、

(10)何があったために新幹線が止まったのですか。(益岡(1997)より)

(11)?何があったため新幹線が止まったのですか。(同上)

という例から、疑問の焦点になりうるのは(10)のみであるとしている。これらのことから、「ため」と「ために」ではそれが構成する原因節の従属度が異なることがわかる。すなわち、主張の焦点、疑問の焦点になりうる「ために」の方が従属度が高いということである⁴⁾。この点から、「ために」の方が連体修飾節内に収まることが多いのではないかと予測し、連体修飾節内に収まるか否かについて調べてみたところ、連体修飾節内に収まるものは、「ため」で10.5%(37例)、「ために」で19.1%(26例)と、やはり「ために」の方が連体修飾節内に収まるものの割合が高かった。以下に連

体修飾節内に収まるものの例を挙げる。(12)は「ため」の、(13)は「ために」の例である。

(12)これは法面崩壊のため耕作地に生じたクラックで、法肩から100m以上に及んでいる。

(13)寒さのために樹木が割れる現象について

筆者が予想していたよりは差が小さかったが、一つの特徴として認めてもよいと思われる。「ために」の方が「ため」より従属度が高いという性格は、学術論文においてのみ認められるものではないため、恐らくこの傾向は論文に限らず一般的、普遍的に認められるものではないかと考えられる。

3.3.2 談話レベルにおける特徴

一文レベルでは両者に際だった相違が見られなかったため、前後の文脈を含めて観察したところ、「ために」に比較的好く用いられる文脈があることが認められた。それは、

- a)ある現象を述べ、その原因を後から記述する文脈
- b)ある現象を述べ、それがいくつかの原因の連鎖の結果起きたことであることを記述する文脈
- c)対比・逆接の文脈

の三つである。以下では、a)～c)それぞれについて記述する。

a)のタイプの文脈

a)のタイプの文脈では、パターンとしては「結果(Q)→原因(P)のために結果(Q)」という形で用いられる。例えば、以下のようなものである。少々長いので、前後の文脈を見るために必要な部分のみを引用する。

(14)また、科や亜目毎の各項目の比較の結果では、ドジョウ科魚類の赤血球の方がコイ科魚類に比べてやや離心率が小さくより円に近い傾向があることが認められた。舟木(1962)によれば、(中略)ドジョウ科魚類はコイ目の中でもかなり進化の遅れた魚種であるために、このような特異的な赤血球の形態を有している可能性もあり、さらなる検討が必要と考えられる。

(15) (前略) 割れ目付近の細胞 (仮道管) 中には着色物質の存在が認められる。また、この凍裂は発生後、開閉を繰り返していたので、その間に侵入した腐朽菌により仮道管壁は穿孔されている。穿孔の形状から侵入したのはいわゆる軟腐朽菌であり、それらの菌糸も見られる。この着色物質は軟腐朽菌の侵入が原因で生産され、そのために刃材部の割れ目付近は着色したと考えられる。

(14)では、まずドジョウ科魚類の赤血球の形がコイと違うという現象について述べられており、その上で、なぜそうなのかを記述している(「ために」の前後にある~~~~の部分をご覧ください)。(15)も同様で、割れ目付近が着色していることが述べられた後、なぜ着色したのかが記述されている。このパターンの特徴は、「ために」の後件が既知であることである。ただし、どのような場合に後件を既知であると見なすかは簡単ではない。例えば、論文の本論の部分で明らかになったことを最後の結論でまとめとして再度提示する場合も既知と言えれば既知であり、明文化されていなくても、その専門分野においては常識であるという点で既知と考えられる場合もある。しかし、全ての論文を読み通すこと、あるいはその分野における常識を専門外の筆者が判断することは困難であるため、本稿では、明らかにパターンとして取り出せるものに限って抽出した。具体的には、上記のように直前か、少なくとも当該章・小節内に情報があり、それに対する原因説明が続く場合のみを取り出すという方法を採用した。

b)のタイプの文脈

b)のタイプの文脈では、パターンとしては「結果(Q)→これは、原因(P1)のために原因(P2)ためである」等の形で用いられている。例えば、以下のようなものである。

(16)オモダカ塊茎の生存状態の圃場試験では塊茎の大部分が形成翌年に出芽したのに比べて、わずかではあるが2年目以後にも残っていた。これは形成深度が深いために10月末までに出芽できなかったためと思われる。

(17)但し、横内他(1991、1992)では暖水渦の北西側に測線がなく、北西からの流入は不明である。三陸沖の暖水渦の西側が陸に近いために、

摩擦による流速の減少がおこっていることがその要因であろう。

(16)では、先に2年目以降も出芽しないものがあつたことが述べられ、次にその原因を記述している。記述の順番としてはa)と似ているが、原因が一つではなく「形成深度が深い→10月末までに出芽できなかった(→2年目以後も残っていた)」と連なっている点、また、「ために」の後件は既知情報ではないという点が異なる。(17)も同様で、北西からの流入が不明であるという事実がまず述べられ、その後「暖水渦の西側が陸に近い→流速の減少が起こっている(→北西からの流入が不明である)」と原因の連鎖が述べられている。

c)のタイプの文脈

c)のタイプの文脈では、「X。これに対して／一方、Yは原因(P)のために結果(Q)である」「X。しかし、Yは原因(P)のために結果(Q)である」等のパターンで現れる。例えば、以下のようなものである。(18)は対比の、(19)は逆接の例である。

(18)しかし、本放牧試験では、グレイザーはほふく型の特徴を顕著に表し、草高が14.4～15.5cm、採食高が5.8～5.9cmと、供試品種の中で最も草高の低い草地を形成した。これに対し、ブラズスは、植物体が大型であるとともに、地際の茎が粗剛であるために、地際まで採食されず、草高(21.9～30.2cm)、および採食高(9.0～9.3cm)が高かった。

(19)(前略)農地の地すべり対策は、地すべりを誘発している地下水の排水工法が施されているが、地下水の流動実態が把握されていないために排水効果のないものが多く対策効率の向上が望まれている。

よく現れる文脈をタイプで分けると上記のようになるが、しかし、これらがそれぞれ別個に現れるとは限らず、(20)のように二つのタイプが重なっている場合もある。(20)ではa)のタイプとc)のタイプが重なって現れている。

(20)萎凋症の特徴として、萎凋の初期にはZ Y M V感染株と混合感染株に萎凋の発現がみられ、萎凋の後期には混合感染株だけで萎凋は継続する。(中略)両接種株では水の移行通路として機能性の高い導管が閉

塞することによって、接ぎ木接着部とキュウリ下胚軸での水の移行が阻害されて萎凋が発現したものと推察される。

(中略)したがって、萎凋が継続する混合感染株では導管の分化・発達に異常が生じ、導管の機能が回復しないために水の移行阻害の状態も継続されるものと推察される。一方、Z Y M V 感染株では中程度の大きさの導管が新生され、この導管によって水の供給が回復するために萎凋から回復するものと推察される。

a)～c)のいずれかのタイプの文脈に現れている「ために」は、原因用法の「ために」のうち61% (83例) あった⁵⁾。このことから、a)～c)は「ために」の用いられ方の特徴の一つとして認めてよいと考える。この特徴が「ため」にも当てはまるかどうかを見るため、「ため」についても数えたところ、a)～c)のいずれかのタイプの文脈に現れている「ため」は、原因用法の「ため」の28.4% (100例) と、「ために」に比べるとかなり低かった。このことから、a)～c)は、「ため」では「ために」ほど明らかな特徴とは言えないと見なせる。

さらに、「ため」にも、「ために」におけるa)～c)のタイプのように、よく用いられる特徴的な文脈がないか精査したが、顕著な特徴は認められなかった。したがって、談話レベルでは、「ために」はある程度決まった文脈に現れる傾向があるが、「ため」にはそのような傾向が認められないと言うことができる。

3.3.3 談話レベルにおける特徴が現れる原因について

a)～c)のタイプに「ために」が「ため」より多く用いられることは、焦点化によって説明ができる。

寺村 (1992) は、「～トキ」「～トキニ」「～トキハ」の用法の違いを説明しており、その中で「PトキニQ」は「Qという事態の発生が既知の情報であって、それがいつ起こったのかが問題になっている場合に典型的に使われる」と述べている。また「PトキQ」については、「まずPという事態を述べ、次にそれに続いて起こったことを、いわば発見として述べる場合」に適しているとしている。これを受けて益岡 (1997) は、このような寺村の観察が、他の従属節を対象として一般化できないかどうか検討している。益岡は「PトキニQ」について、「Qの事態の発生が既知の事柄

であるという意味は、『のだ』を付加した表現におけるほうが得やすい」とした上で、

「PトキニQノダ」は主節の事態が起こったことを前提として、その事態がいつ起こったのかを新情報として従属節の部分で表すことができるということになる。本章では、このような場合を、時を表す従属節(以下、「時間節」と呼ぶ)が「焦点化」できるという言い方で表すことにする。この言い方で言えば、「PトキQノダ」のほうは、時間節を焦点化することはできないということになる。

と述べている。そして、この焦点化に関する違いが、時間節以外にもあるか否かを3.3.1で引用した主張の焦点、疑問の焦点によってテストし、「ため」と「ために」にも当てはまることを指摘している。これら寺村(1992)と益岡(1997)の知見に基づけば、「ために」は「トキニ」とパラレルな性格を持っていると言え、これがa)のタイプで「ために」が多く現れることの説明となりうる。すなわち、「PトキニQ」が「Qという事態の発生が既知の情報であって、それがいつ起こったのかが問題になっている場合に典型的に使われる」(寺村(1992))のと同様に、「ために」節も、後件が既知であり、なぜそのような現象が起こったのかが問題になっている文脈で「ため」より使われやすいと考えられるのである。

「ため」と「ために」の焦点化に関する違いについては、今尾(1991)にも指摘がある。今尾は『「タメニ」は専ら焦点要素にのみ接続する」としている。そして、b)・c)についても、「ために」の、「この「焦点要素に接続する」という性格で説明ができると考える。すなわち、b)もa)と同様に予め現象の説明があり、その後になぜそのようなことが起きたのかを説明する文脈なので、原因節に焦点が来やすく、「ために」が多く用いられていると考えられる。c)についても、「P。これに対してQ」等の文脈では、Pと異なったことが起きていることをQで敢えて対比させて述べるため、単に違うということを記述するだけでなく、なぜそのように違うことが起きたのかを明確にしたいという発想から使われていると考えられる。

a)～c)の文脈で「ため」より「ために」の方が頻繁に現れる現象が焦点化によって説明できるということは、この現象が学術論文に限られたこ

とではなく、一般的、普遍的に起こる可能性が高いことを示唆している。なぜなら、「ために」が焦点要素につくという性格は、何も論文の中でのみ発生することではないからである。

ただし、この焦点化に関しては益岡（1997）と今尾（1991）とで若干見解が異なるように思われる。両者とも「ために」が「焦点化できる」（益岡）、あるいは「焦点要素にのみ接続する」（今尾）という点では一致しているが、「ため」については、益岡が焦点化できないとしているのに対し、今尾（1991）は「焦点要素に後続しやすい接続形式である」として意見が割れている。これは両者の焦点化に関するテスト方法の違いからくるもので、益岡のテスト方法では「ため」は焦点化されないが、今尾の方法ではテストにパスする場合があるからである⁶⁾。思うに、「ため」は、焦点化される場合もあれば、されない場合もあるという曖昧な存在なのではないだろうか。そしてそのために、a)～c)のタイプにおける出現割合や、連体修飾節内に現れる割合において、「ため」と「ために」で極端な差が出なかったのではないかと考えられる。明らかに「ために」のみが焦点要素に接続するのであれば、もう少し差が開いたのではないかと推測される。

4. 終わりに

以上、本稿では「ため」と「ために」の農学系学術論文における使用実態の相違について、原因用法を中心に検討してきた。その結果明らかになったことは以下の通りである。

- 1) 「ため」は主に原因・理由用法に、「ために」は主に目的用法に用いられる。
- 2) 「ため」は原因にも理由にも用いられるが、「ために」は原因に用いられることはあっても、ほとんど理由に用いられることはない。
- 3) 原因を表す「ために」には、いくつかの特徴が認められた。それは①「ため」より連体修飾節内に収まるものが多い。②談話レベルにおいて「ために」が用いられやすい文脈がある、ということである。談話レベルにおいて用いられやすい文脈とは、a)ある現象を述べ、その原因を後から記述する文脈、b)ある現象を述べ、それがいくつかの原因の連鎖の結果起きたことであることを記述する文脈、c)対比・逆接の文脈、の三つである。これらa)～c)の特徴は、原因を表す

「ため」では「ために」ほど顕著に現れず、また「ため」に独自の特徴も認められなかった。「ために」に上記の特徴が「ため」よりも顕著に現れている原因は、いずれも焦点化によって説明ができる。

これらの知見をレポート作成のための予備教育に生かせば、学習者の疑問に答え、より適切な文章の産出の一助となると思われる。

しかし、今回は一分野についてしか分析を行うことができなかった。1)～3)の中には、本文でも述べたように、農学系論文にのみ現れるものではなく普遍的な傾向ではないかと推測されるものもあるが、それを確かめるためには他分野の論文を分析する必要がある。また、原因・理由表現の一つとしての「ため(に)」の用いられ方を明らかにするには、理由用法についても分析を行わなければならない。さらに、a)～c)のタイプに「ため」より「ために」の方が多く用いられることは焦点化で説明ができるが、なぜ「ために」は目的用法が多いのか等不明な点もあり、これらの点も含めて、「ため」と「ために」の違いの全貌を明らかにするためには、その他の用法についての分析も行う必要がある。これらについては今後の課題としたい。

注：

- 1) 「ため(に)」の用法の区分には、例文(3)のように、後件が意志動詞であるものは「目的」に分類し、「利益」には「あんな奴は社会のためにならない」のようなもののみを入れる立場(森田(1980)等)と、(3)のようなものも「利益」に入れる立場(グループ・ジャマシイ(1998)等)がある。本稿は後者の立場で分類している。
- 2) 正確に言えば、「ためにである」という用法もないわけではない。もしコーパスの中にこれがあれば、「ため」と「ために」の両方が存在することになるため、分析の対象としなければならなかったであろう。しかし、コーパスの中に「ためにである」は一つも現れなかったため「ためである」は除外した。
- 3) 同論文は、原因・結果の関係は、「《私》にとっては客観的であり、《私》はその関係の中に些かも入り込んではいない」が、「動機づける出来事は原因に違いないのだが、《私》の積極的な態度の当然さ・正当さを表現するものであれば、それは《私》がなぜそのような積極的な態

度をとるのかということの《理由》になる」としている。

- 4) 焦点化と従属節の従属度の関係については田窪 (1987) に詳しい。
- 5) ②0に例を挙げたように、ある文脈に二つのタイプが重なって現れる場合もあるが、その場合でも a)～c)のいずれかに該当するものの一つとして考え、ここでは出現頻度一回にカウントしている。
- 6) 今尾 (1991) は、1) 強意の副助詞「コソ」の付加が可能か、2) 強意の終助詞「ヨ」の付加が可能か、3) 疑問の終助詞「カ」の付加が可能か、4) 疑似分裂文が作れるか、5) 「ダ」による代用省略ができるか、6) 埋め込み文における主節の省略が可能か、という6つテストフレームによってテストを行っている。今尾によると、「ため」は、このうち1)のみ不可能で、あとの5項目に関しては可能であるとの結果が出ている。今尾はこの結果に基づいて、「ため」を含む要素は焦点になりやすいと結論づけている。

参考文献：

- 今尾ゆき子 (1991) 「カラ、ノデ、タメーその選択条件をめぐってー」『日本語学』10巻12号
- グループ・ジャマシイ (1998) 『日本語文型辞典』くろしお出版
- 言語学研究会・構文論グループ (1985) 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文(二)ーその2・原因的なつきそい・あわせ文ー」『教育国語』82
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』5月号vol. 6
- 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集1』くろしお出版
- 益岡隆志 (1997) 『新日本語文法選書2 複文』くろしお出版
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語2』角川書店

参考資料：

- 農林水産研究情報センターネットワークライブラリシステム研究報告データベースホームページ：<https://rev.cc.affrc.go.jp/cgi-bin/browse2>
(2000年3月取得)

いけがみ もとこ (留学生センター非常勤講師)

A study of TAME and TAMENI

– An analysis of a corpus of theses on agriculture –

IKEGAMI, Motoko

This article examines the uses of TAME and TAMENI through an analysis of a corpus of theses on agriculture. In this analysis, the following results were found:

- 1) TAME is mainly used for expressing causes or reasons. TAMENI is mostly used for expressing purposes.
- 2) While TAME is used for both causes and reasons, TAMENI is rarely used for reasons.
- 3) TAME expressing causes has no characteristic sentence or discourse usages.
- 4) TAMENI expressing causes has some characteristic usages. ① TAMENI is more frequently used in relative clauses than TAME. ② TAMENI is often used in certain discourse patterns. a) In the first pattern, some phenomenon is first described, and then the cause of that phenomenon is described. b) In the second pattern, some phenomenon is first described, and then it is described how more than one thing causes it. c) The third pattern is the description of a contrast or a concessive clause.